

人ありて

地域の活動者たち



三宅明信さん

昭和五十年代初め、筑後市北長

田の浄土宗林鐘院の境内から三十数台のバイクの一団が、一斉に爆音を轟かせて阿蘇へと疾駆して行った。「FCR」(福岡筑後林鐘院)と呼ぶ暴走族。当時は「ローリング族」と言われた。親玉は大学を出たばかりの住職というから驚きだ。メンバーは学校に行かない高校生、職を持たない者も交じる青年たち。当の住職三宅明信さん(50)は「厳格な父親に反抗しての行動で、仲間も似た境遇だった」と述懐する。彼らは毎週土、日曜日の昼間出かけたが、筑後署や熊本県警からもマークされていた。平成6年頃に自然消滅した。

■暴走族、僧侶、塾教師

三宅さんは天草の生まれ。住職のいない寺を回る求道者の父浄厳さんに連れられ家族と各地を転々。林鐘院に入った。昭和45年、寺の総代が父親と相

暴走族一転、青少年育成指導者に

談して子ども会を結成。三宅さんが月一回面倒をみることに。これら子どもたちと交わる嘴矢になった。

三宅さんはこの後、小中学生を対象にした三宅塾を開く。授業料無料で初めは三、四人が入塾、週二回開いていたが、毎日となり生徒も約三十人に増えて、本堂は少し詰め状態。これらは暴走行為を始める前からで、暴走族になっても続けられた。一方では仏の道を説き、子どもたちに学習を教える。何とも奇

筑後市夏、冬開く「友愛キャンプ」

妙な構図。半面教師にしても稀有な存在で、平成4年2月テレビが取り上げるところとなり、全国に知られた。塾は今も続き、暴走族の仲間が教えたことも。「勉強のできる者もいたので」(三宅さん)。 ■「友愛キャンプ」に参画 そんな三宅さんが本格的に青少年育成の仕事に取り組んだのは、昭和60年に筑後市から公民館主事の要請を受け、就任したこと。同時に市の青少年育成市民会議の事務局長になり、お膳立てされたメニュー「友愛キャンプ」を通じて直接的な指導に乗り出した。そ

の活動ぶりは「友愛キャンプ」を実質的に立ち上げた一人ともいえる。 そのうちに市民会議が日本生命財団から百万円の寄付金を受けた。これで TENT 十張りを買った。 キャンプは真夏の8月と厳寒期の2月の年二回。参加の子どもたちは夏が約百人の大集団、冬は約五十人。これに市教委社会教育課の職員やボランティアのスタッフが付く。ボランティアの大半は三宅塾の卒業生や元暴走族だった人というから、塾の成果がこんなところでも出ている。



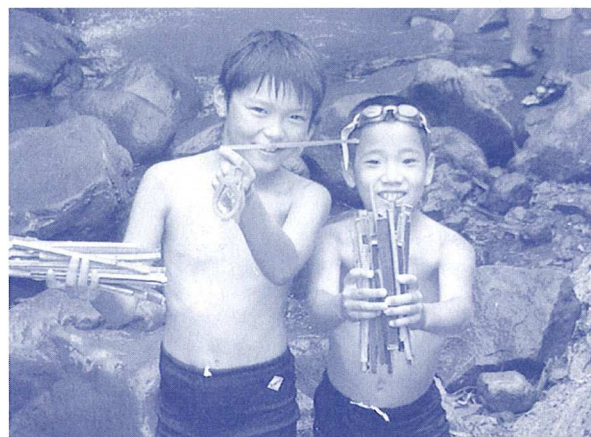
キャンプ地の施設で、キャンプの心構えを話す三宅さん

■テントがつぶれる

一泊二日のキャンプは夏が長崎県加津佐や熊本県山鹿市近郊の渓谷、県内の日向神ダム周辺など。海水浴、溪流遊びに孟宗竹を切り、割り箸や各種用具を作る。雨天でも決行。佐賀県川上峡では驟雨に襲われ、テントの支柱が折れてつぶれた。幸い外で遊んでいたが無事だったが。 ■山地での耐寒訓練 冬季のキャンプは

■ジュニアリーダー養成も

三宅さんの活動は「友愛キャンプ」だけで終わらない。子ども会のリーダーが必要で、ジュニアリーダー養成の講習会を、平成2年に発足させた。小、中学生が相手で、6月には朝倉郡夜須町の夜須少年自然の家泊まって野外訓練を。8月の「友愛キャンプ」に



溪流地のキャンプで、宝探しの用具をつくる少年たち

参加して、講習でどの程度知識や技量を身につけたかをテストする。講習会が終わると、中三の生徒に市民会議の名で、ジュニアリーダーになったという認定証を与える。この中にも三宅塾の塾生が含まれていて、何ともたのしい。 テレビで紹介された三宅さんは一年に約百回、全国の関係団体に招かれて講演を。また僧侶として熊本方面も含め、五百世帯の壇家回りに寧日がない。

三宅明信(みやけみよしん)

昭和60年から筑後市青少年育成市民会議の事務局長、副会長、青少年部会長を務める市民会議の中心メンバー。子ども会と市民会議の接着剤をとめていて企画、組織づくりの活動家である。